



「感情の生き物」

長い間生きてきた。が、つくづく「なんであんなこと言ったんだろう」と反省しなければならなくなることが、なくなるのだ。

神様は、きっと人間に賢さと愚かさをどちらもくださったのだろう！

自分は、賢さ<愚かさのように思う。どうも賢くない。だから、「反省」することがよくある。神は、私に「自分の愚かさをお許してください」と言わせる機会を何度も確保していただいているようだ。



(ノースポール 柏原公民館 2024.11.22)

おかげさまで、反省する機会だけは結構他人には負けないかなと思っている。ただ、私の頭脳は、結構ノー天気なようで、一度寝たら、もういつもの自分になっている。反省する期間が短いようである。



(ナゲシコ 柏原公民館 2024.11.22)

「人をあつかうときは、相手が感情の生き物であって、論理の生き物ではないことを忘れてはいけない」(『D・カーネギーの未来を拓く言葉』創元社 2016)

意見や考え方などが対立した時、どうも感情が邪魔をしてしまうことがある。もちろん、論理で物事を進めるとうまくいのかもしれない。だが、それは確かなのか？

裁判などがいい例だ。同じ事件の裁判なのに、地方裁判所と高等裁判所で判決内容が違ってくることがある。どこが論点で、その根拠はどこにあるのか。そもそも、感情と論理を、人はどのように使い分けられるのか。



(山茶花 自宅 2024.11.22)

D・カーネギー氏の教えはもっともである。果たして自分にはできるのだろうか？



(北西の山々 延岡市緑ヶ丘より 2024.11.20)